



江戸期の出島の1年について  
紹介する山口さん  
＝長崎市、県勤労福祉会館

## 出島の1年を解説

市復元整備室の山口専門官

長崎史談会（原田博二会長）の本年度第2回長崎学公開講座が20日、長崎市桜町の県勤労福祉会館であった。第1部で市出島復元整備室専門官の山口美由紀さんが「出島の四季と行事」と題し、出島オランダ商館でみられた季節ごとの業務や慣例について講話した。

オランダ船が入港した6～7月（陰暦）を起点に、出島の1年を紹介。新しい商館長と共にさまざまな品物を積んだオランダ船が入港し、夏は長崎の人々にとって貿易業務で多忙な時期となった。

入港手続きから世界情勢を伝える「オランダ風説書」の提出、貿易品の検査、入札、荷渡しなど多くの業務があり、山口さんは「各年でいろいろな問題があり、期限内に終わらせるのは大変だった」と述べた。

9月に輸出品を積んでオランダ船が出港すると、出島のオランダ人にとって次の夏まで「退屈な日々」が続いた。それでも秋になると長崎くんちの見物や、冬

を迎えるために食料などの準備、冬至と正月の祝いといった年中行事があった。

年が明けると商館長らは江戸参府に出発。約3カ月の行程は「負荷の大きな旅だった」。その後4月の「ジヤガタラ占領記念日」や5月の「ワートルロー戦勝記念日」の祝いを経て、また6月のオランダ船入港を迎えた。

山口さんは「オランダ人が書いた書物からは、日本で制限の多い不自由な生活を強いられながらも、オランダ人たちが日本の四季を楽しんでいたことが読み取れる」と語った。

第2部では原田会長が長崎市の江崎べっ甲店に残る「今魚町宗旨改踏絵帳」を調査して分かったことを紹介した。（田代菜津美）



▽芳賀日出男著「秘境旅行」

日本にはもはや地点としての秘境はない。しかし、光景としての秘境ならある。主として昭和30年代の10年間、写真家は各地の